

第4章 景観構造と特徴

第1節 集落の構造と特徴

(1) 集落の立地と土地利用

奈留島は五島列島の中央に位置し、細長い半島が四方八方に広がる地形とともに、複雑な海岸線と急斜面をなす山腹によって形成されている。これらの地形は三つの尾根を中心に、東側の尾根から奈留島第一の標高を持つ^{ひよどりごえ}鴨越(276.0m)～汐池山(226.5m)～水晶岳(183.0m)・^{とめぼんやま}遠見番山(193.2m)と続くもの、奈留島中央部の^{しろんたけ}観音崎～城岳(189.2m)～大林峠(146.1m)～^{なるがみばな}鳴神鼻、さらに西側の早房山(253.2m)～飯盛山(139.7m)に続くものがある。これらの尾根は細長く急峻な山系であるため、奈留島は全体的に平地が少ない。そのため開拓された田畑が広がっていったが、外海から移住して来た多くの人々によって、先住者が開拓し尽くした田畑の残り、いわば狭隘な山間や海に迫る荒れ地といった住みづらい僻地が開拓され、集落が形成されていった。そうした経緯から、奈留島内には大きな河川は発達しておらず、細長い半島の両側尾根を分水嶺とする小河川や溪流がいくつも流れている。また海岸付近にはいくつもの小規模沖積地が点在し、規模の大小にかかわらず集落が築かれており、奈留島の文化的景観を特徴付ける地形ならびに集落構造として捉えることができる¹⁾。

(2) 集落の分類

奈留島の代表的な文化的景観を有する代表的な集落は、江上集落、大串集落、矢神集落、汐池集落、椿原集落である。江上集落と大串集落には生業形態や土地利用において共通点が見られ、その文化的景観構成要素の背景として、奈留島に隣接する久賀島との深い関係性が明らかとなっている²⁾。また矢神集落は冬場の北西風が直接当たり、良好な居住環境と言いつてもあるが、背後に迫る鴨越のふもとに住居がまとまって展開している。一方、汐池集落は奈留島の地形を特徴付ける地質現象「ラグーン(註1)」を有している。椿原集落は小さな入り江で周囲を高い山に囲まれており、すり鉢状の地形構造を呈している。奈留島には22集落中11集落が移住集落であり、移住者である「潜伏キリシタン」は島民に「カクレ」や「ヒラキ」「イツキ」等と呼ばれていた。一方、奈留島に先住していた11集落は仏教徒であり、「地下(ジゲ)」



図4-1 調査対象の集落位置図

と呼んでいた。ここで江上・矢神・汐池・椿原は移住集落、大串は地下集落にあたる³⁾。

ここでは、江上集落、大串集落に注目し、それぞれの景観特性と空間機能的特性を調査した。これら2つの集落を調査対象として選定する理由は、まず、藩政期以来の集落として、奈留島のなかでも往時の景観を残している「大串集落」を地下集落の代表として選定した。

また、移住集落については、大串集落と密接な関わりが深い「江上集落（世界遺産『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』の構成資産となっている集落）」を選定した。

移住集落については、矢神集落、汐池集落、椿原集落にも着目し、それぞれの景観特性を記述する。なおこれらの3つの集落を選定する理由として①奈留島の文化的景観を特徴付ける地形や集落構造であること、②各集落すべてにおいて潜伏キリシタンが密かにキリスト教の信仰を継続するために形成した「移住集落」であることである。⁴⁾(図4-1参照)

1) 江上集落

江上集落は奈留島の北西部に位置しており、大串湾に面する小さな入江に開けた集落である。後方には山が迫り、平地に恵まれていない自然条件のもと小規模な半農半漁が行われていた⁵⁾。図4-2に示した通り旧江上小学校の南側に平成20年に国の重要文化財に指定された江上天主堂が存在している(図4-3)。同天主堂は明治39年に現在の敷地に簡素な教会として建設され、大正7年に当時の教会建築の第一人者、鉄川与助によって現在の江上天主堂の姿となった(註2)。一方、江上集落は両側を斜面に挟まれてまとまりのある圍繞的な景観となっており(図4-4)、集落北部の小高い場所にはカトリックの墓の形態を伝えるキリシタン墓地が確認されている(図4-5)。当時キリシタンの数は40から50戸(約190人)であり、大正6年に大串集落と共同で行っていたキビナゴ漁が大漁であったこともあり、漁で得た資金を江上天主堂の建設資金に充てることができたというエピソードが伝わっている⁶⁾。内部の柱には木目模様が手描きされており、スタンドグラスの代わりに透明ガラスに花が描かれるなど信者の献身的な作業が行われたことが推測される。

江上天主堂は、奈留島内に建てられた最初の教会堂であったため、島内の各集落や隣接する久賀島からもミサへの参加があった。

一方で昭和40年ごろまでの江上集落は、急峻な斜面を活用した段々畑が形成されていた(図4-6)⁷⁾。しかし、生業の主体が大串集落と共同で行うキビナゴ漁に移行したことを期に、段々畑の管理は滞っていくようになる。現在、江上集落は斜面の石垣と小規模な畑が民家と調和しながら、小さなまとまりを形成している。また漁業の面では、イワシ漁、キビナゴ漁と共に、イワシの煮干し加工産業が盛んであった。この煮干し加工は江上集落と大串集落の共同で行われており、海岸には加工の際に使われた天日干し用の「ガケダナ」が広がり、生業と密接な景観構成要素として位置づけられる。しかし、ガケダナは昭和30年の海岸道路整備によって石垣とともに消失していることも明らかとなった。江上集落の人口は、江上小学校の廃校(1998)も相まって、急激な過疎化により、1957年には185人だったものが、2003年には

12 人にまで減少しており、2019 年 1 月末現在では、3 世帯 5 名を数えるのみとなっている。

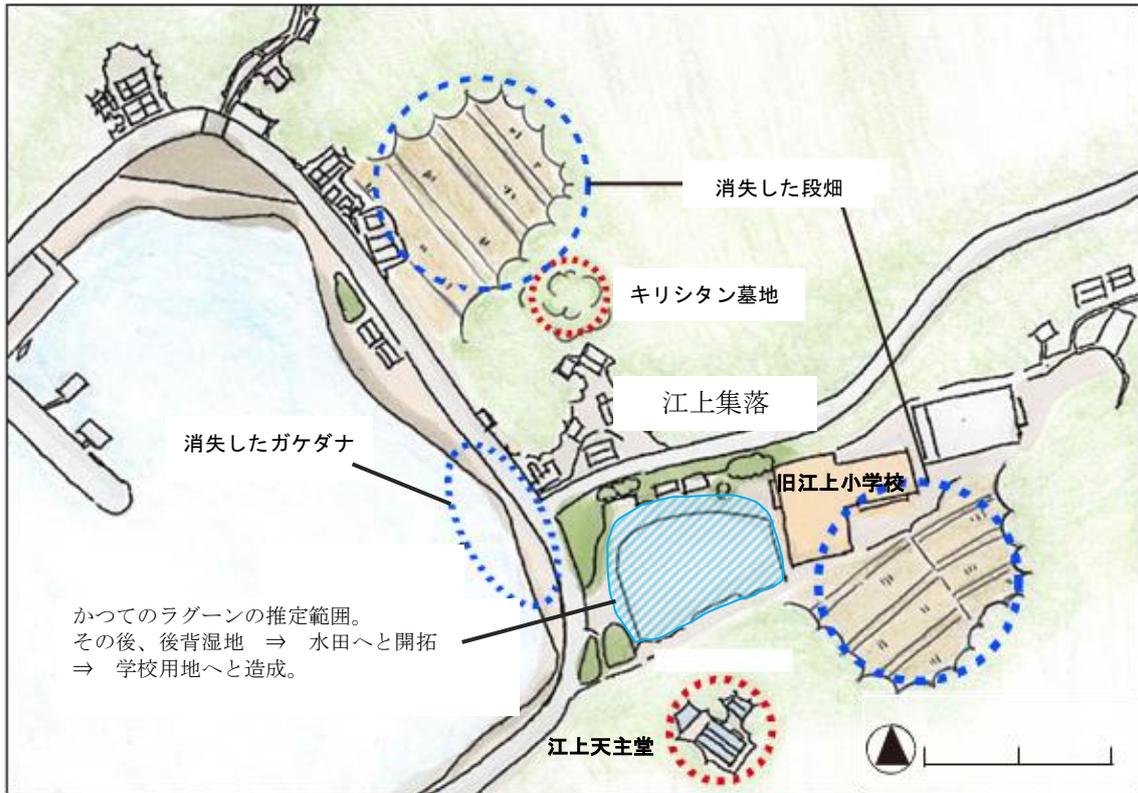


図 4-2 江上集落平面図



図 4-3 江上天主堂



図 4-4 江上集落の囲による景観



図 4-5 キリシタン墓地



図 4-6 昭和 40 年代の旧江上小学校

2) 大串集落

大串集落は江上集落と同様に島の北西部に位置し、人口は昭和32年には574人、平成15年には137人であったと記録されている⁸⁾。大串集落は、南向きに開けた大串湾岸に沿った集落で、湾の奥は北方からも野首浦が入り込んだ地形を呈している(図4-7)。

後方には高い山が迫っており、平地の狭い圍繞景觀が形成されている。また集落の北側には江上天主堂前の遠命寺トンネルの工事で出た土砂等で設置された防風堤も設置されている(註4)。

大串湾は明治後期以降、大串集落の主産業であるキビナゴ漁の良好な漁場としても利用されていた(図4-8)。また大串集落には古くから「日枝神社」が存在しており、数名の平家の落人が住み着き、拝殿を建設して信仰したことがその始まりとされている(図4-9)⁹⁾。

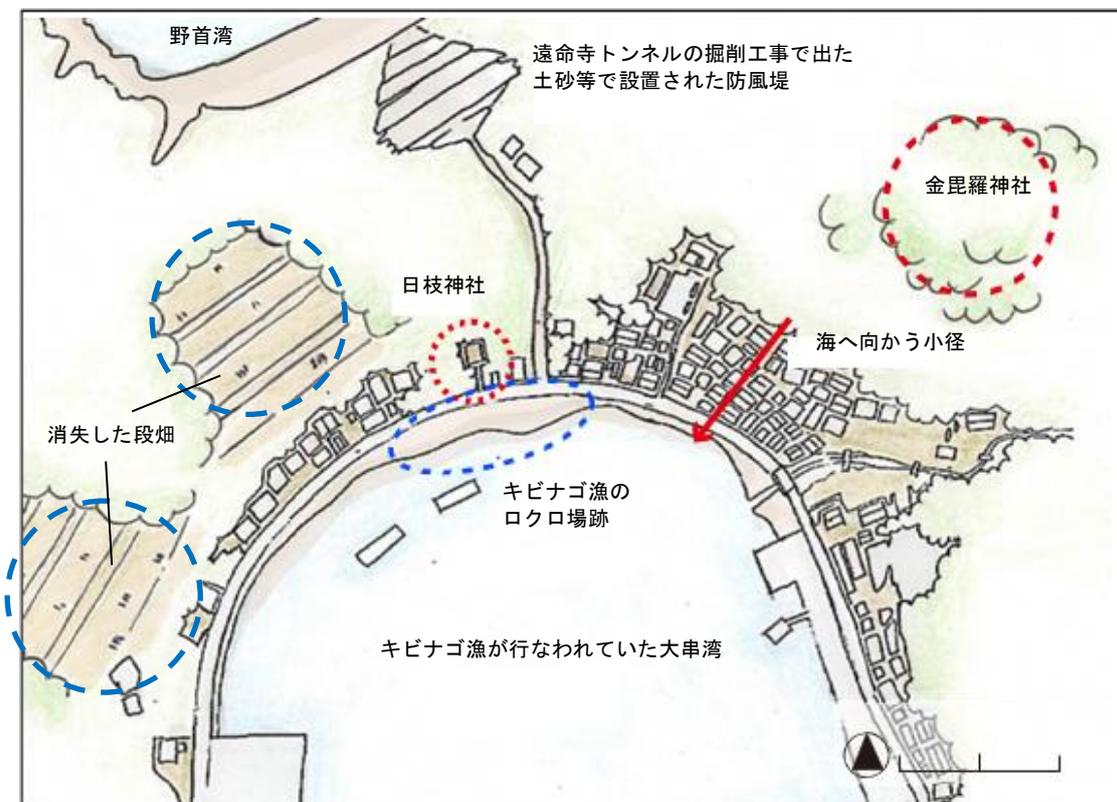


図4-7 大串集落の平面図



図4-8 キビナゴ漁



図4-9 日枝神社(明治28年)



図4-10 例大祭(昭和42年)

明治18年には、それまでの拝殿を改築し8坪の社殿が建設され、昭和2年頃にはキビナゴ漁が豊漁になったことから現在の形となった。また拝殿の外観には唐津から来た大工による彫り物が確認される。旧暦9月25日には神輿を担いで村を回る例大祭が開催されていた(図4-10)。現在、例祭は行われていないが、日枝神社内に使われていた神輿が残されている。

大串集落の民家の多くは密集かつ屋根の傾斜が海側に向いており、民家の間には狭い小道が存在している。さらに集落を見下ろせる位置に大漁を祈願する金比羅神社を有し、漁村らしい風景が残されている(図4-11)(註4)。この集落形態は漁村集落の特徴と捉えられよう¹⁰⁾。また大串湾においても日枝神社の前にガケダナが広がっており、生業と密接な結びつきを持つ景観構成要素と位置づけられる。現在、神社前にはコンクリートによって整備された地引き網漁のロクロ場が残されている。

大串集落の裏山の中腹には豊漁と漁民の安全を祈る金比羅神社があり、薬師堂(註5)後ろの寺屋敷からその横の小道を上って、さらに199段の石段を上った山頂にある。現在、道は整備されておらず、山頂のお堂までの経路も繁茂した樹木によって覆われてしまっている。お堂本体も草木に覆われており、ほとんど管理がなされていない。集落が賑わっていた頃には金比羅神社から集落を見下ろすことが可能であり、漁村集落の典型的な集落構造を呈していたことが伺える(図4-12, 13)。



図4-11 大串集落の民家の屋根の向き



図4-12 金比羅神社から集落を望む写真



図4-13 大串の金比羅神社

一方で大串集落は奈留島内の漁業という生業の歴史を探る上で貴重な集落と位置づけられる。農業に関しては、地形上平坦な耕作地が乏しいため、畑でサツマイモや小麦を主要作物として耕作してきたが、生産性が低いことから現在では自家消費用として栽培されているのみである。集落を囲む山に沿って広がっていた段々畑は、現在土留めの石積みのみが残っており、金比羅神社に向かう道中にも同様の石積みを確認された（図4-14）。

また奈留島における景観の特徴的なものとして、大串集落鯉ノ浦の海岸近くに存在するラグーンが挙げられる（図4-15）。そばには池塚と呼ばれる塚もあり、平家の残党の墓といわれる説と、大串に「えきり」が流行した際の隔離された人々の死体が埋められたとの説もある。前者については、平家の残党の3姉妹（とよ姫、つる姫、さよ姫）が祀られており、神様が女性であるために池（顔）が汚れることを嫌って、池の真ん中に葉っぱが落ちてはすぐに岸に流れるとの言い伝えがある¹¹⁾。また、当時学校が未だ建設されてなかった時代には「信仰すれば字（学問）がわかるようになる」との流布から、多くの信者が集まったとの記録がある。こうしたラグーンをはじめとする奈留島の自然地形は、島内の交通網やインフラが変容した現在も残されている。



図4-14 段々畑の土留めの石積み



図4-15 池塚のラグーン

3) 矢神集落¹²⁾（図4-16、23）

矢神集落は島の北東に位置し、地名は神様が高い山から矢を射たところ、この地に矢が落ちたことからこの名が付いたとされている。集落は平地が比較的狭いため、集落沿いの港には船着き場が隣接し、陸側に住宅が点在している（図4-16）。集落背後には前述した奈留島一の標高である鶴越の山々が迫り、耕地は狭い。そのため集落の背後には段々畑が広がっていたことが確認されており、サツマイモと麦を輪作する農業形態であったことも把握された。しかし、およそ昭和40年以降、同集落の農業は縮小し、そのため段々畑も消失に至っている。現在は段々畑の存在をうかがえる管理されていない石積みが集落の随所に残されている（図4-18）。一方で半農半漁だった矢神集落は、農業の衰退により漁業が基幹産業となる。こうしたことから段々畑もしくは鶴越から海に向かう矢神集落を見下ろす景観の存在とその文化的景観価値が見出されよう。

同様に集落から海側には矢神ノ小島が眺められ（図4-19）、矢神神社では矢神ノ小島に祀っている「小島様」に祈祷する風習とその視線が抽出された。したがって矢神神社ならびに矢神ノ小島への眺めが集落からの重要な文化的景観として抽出されよう。また矢神神社（図4-20）では月夜間の旧暦6月16日に簡潔な例大祭が開催されている。キリスト教禁教期における潜伏キリシタンの移住先として、矢神集落には最初、久太夫と3人の子供が移住し、その後、長吉、紋四郎が続いて移住したと伝えられている。さらに海岸を市幾良の方へ500メートルほど行った先に「カジ穴」と呼ばれる洞窟が存在し、そこは潜伏キリシタンが密かにオラショを唱えていた場所であると言われている。現在、矢神集落におけるかくれキリシタンの信仰は途絶え、カジ穴に向かうキリシタンの人々から見た海沿いからの集落景観は、矢神集落の重要文化的景観価値の高い要素として位置づけられる。また外海に面する矢神集落の海沿いには、現在もイワシの煮干加工の際に使われた天日干し用の「ガケダナ」が存在したことをうかがわせる石の基部ならびに木組み棚が確認された（図4-21、22）。これら海沿いの遺構は保全の対象として価値を有する要素と位置づけられ、文化的景観における整備活用計画の俎上に上るものと考えられる。このように矢神集落の集落景観は、海と山に囲まれた豊かな自然環境に支えられ、生業と密接な文化的景観構成要素が近代化による影響を強く受けた状態と捉える。

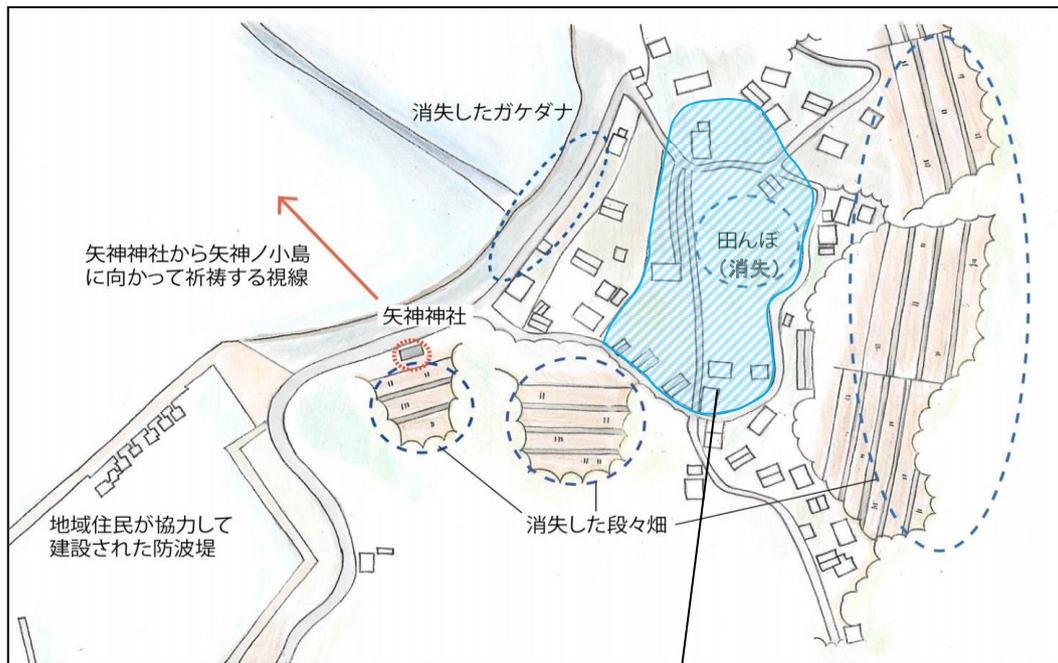


図4-16 矢神集落の平面構成図

かつてのラグーンの推定範囲。
その後、後背湿地 ⇒ 水田へと開拓
⇒ 畑地、宅地へと造成。



図 4-17 矢神集落



図 4-18 矢神集落の段々畑



図 4-19 矢神ノ小島



図 4-20 矢神神社



図 4-21 ガケダナの基壇 (石積)



図 4-22 ガケダナ (木組み棚)

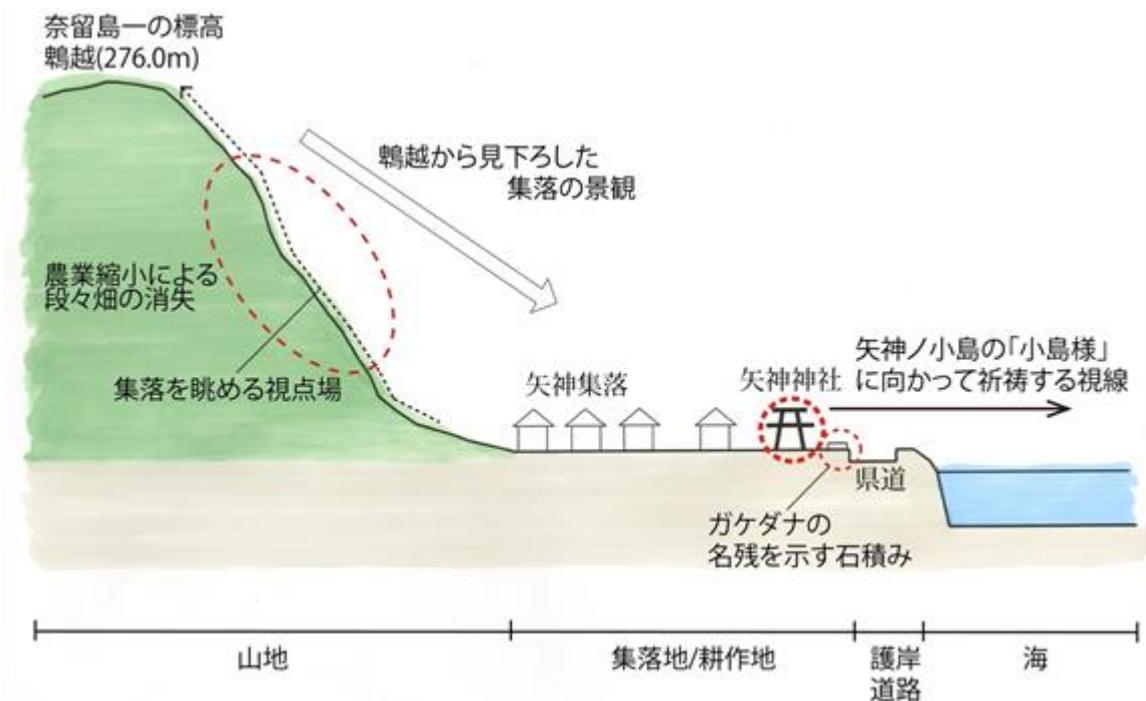


図 4-23 矢神集落の地形断面の模式図と景観構造

4) 汐池集落¹³⁾ (図4-29、30)

汐池集落は本島の東部に位置し、ラグーン現象で堆積した砂礫の上に築かれた集落で、奈留島の地形を特徴付ける地質現象「ラグーン」の発達が見られる(図4-26)。奈留島最大の本ラグーンは面積にして3ヘクタールほどあり、汐池集落はこれを囲むようにして集落が形成されている。

景観調査の結果から、汐池集落の文化的景観に欠かせない景観構成要素として「汐池神社」と上記「ラグーン」、「段々畑」が抽出された。汐池神社は水神としてラグーン方向に向きを取って建てられ、汐池と船廻の井戸に伝わる若い男女の恋物語に関する例大祭が毎年旧暦2月15日に汐池の「池祭り」と船廻の「井戸祭り」として行われていることが把握された(図4-27)。また汐池神社は老朽化の影響を受け、平成10年に鉄筋コンクリートの神社に改築されている(図4-28、24)。ラグーンでは30~40年前、ウナギやボラが生息し、当時の住民達はそれらを釣り上げて食したなど、集落住民の暮らしと密接な関係にあったことが同調査より明らかとなった。

また汐池には一カ所の狭い湖口があり、外海とつながっていることも確認できた。さらに汐池には船溜まりが存在し(図4-25)、かつては小さな船が海から運ばれて汐池の中に入っていた史実も明らかとなった。またこうしたラグーンを取り囲むように、隣接する山地の耕地として7~8合目までは段々畑が広がっていたことも把握されている。しかし、段々畑はおよそ昭和40年以降に生業の主体が漁業へと移行したのを機に、維持管理が滞っていく。以上のことから、神社から眺められるラグーンかつ段々畑から見たラグーン越しの神社への眺めが、本地区の文化的景観構造として重要であるものと推察される。

一方で、調査より海岸には漁業における加工の際に使われた天日干し用の「ガケダナ」が広がっていたことが明らかとなっている。しかし、昭和31年、汐池港に台風12号の大波が押し寄せ、海岸の民家が流される被害を受け、その再発防止策として海沿いの護岸道路ならびに防潮堤の建設工事が行われ、その際、上記ガケダナは消失したものと考えられる。



図4-24 汐池神社



図4-25 汐池の船溜まり



図 4-26 汐池 (ラグーン)



図 4-27 汐池祭り



図 4-28 汐池神社(旧社殿)

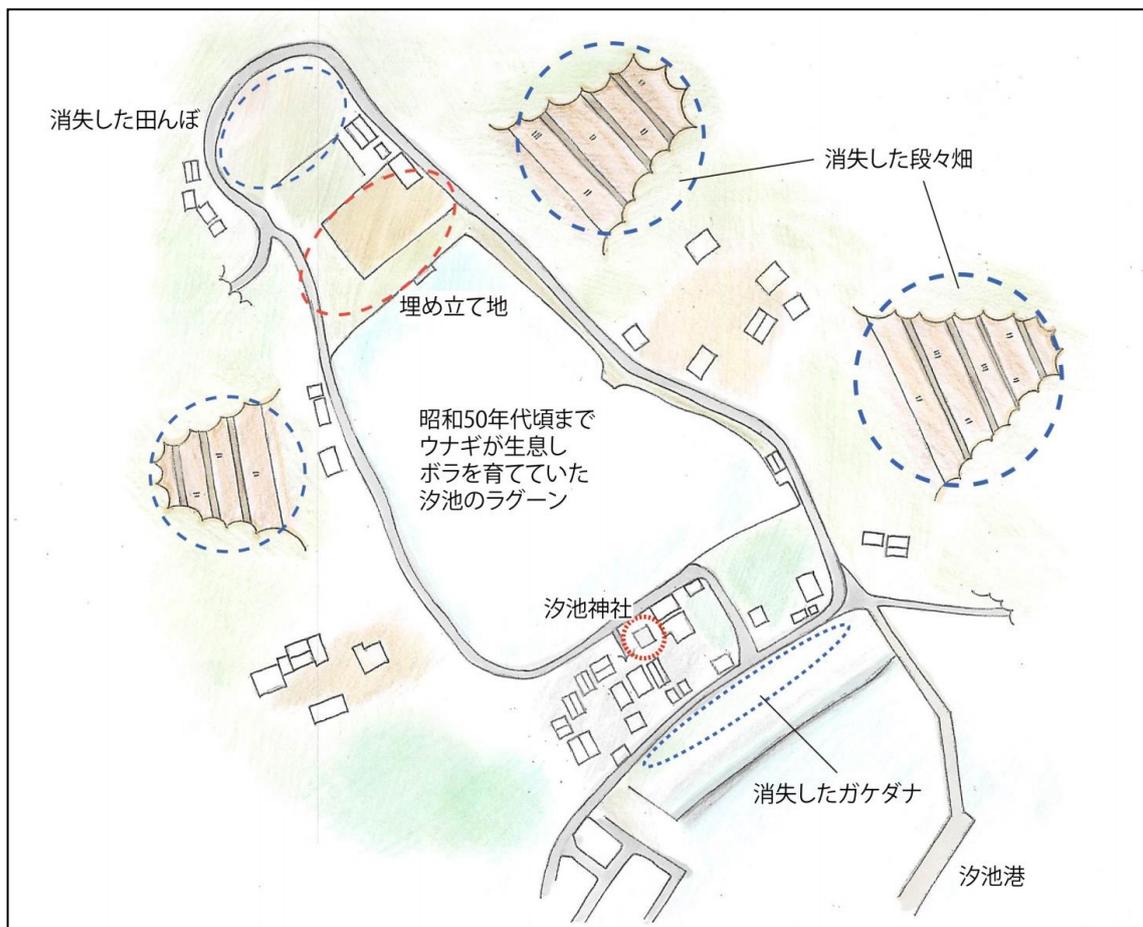


図 4-29 汐池集落の平面構成図

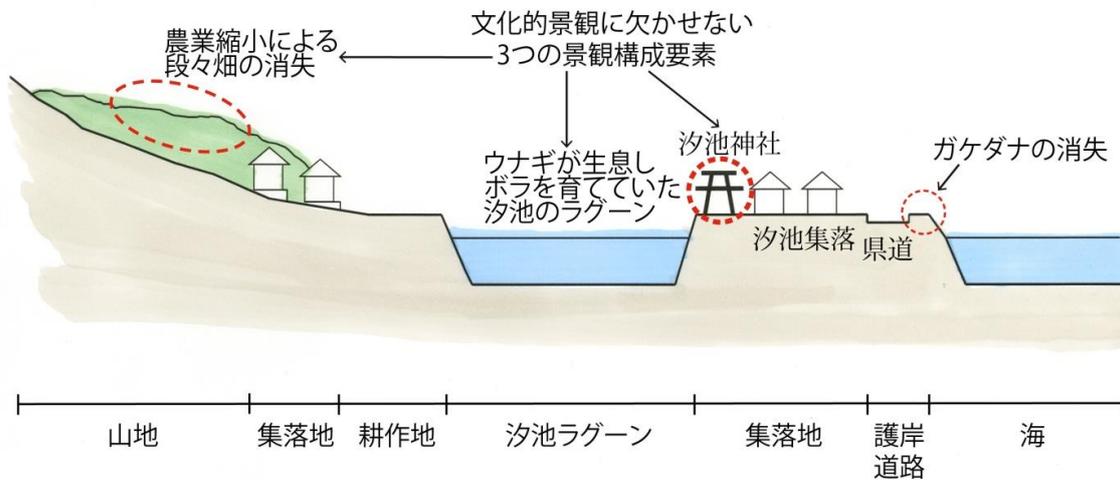


図4-30 汐池集落の地形断面の模式図と景観構造

3) 椿原集落¹⁴⁾ (図4-31、38)

椿原集落は本島の南東部に位置し、小さな入り江で、周囲を標高の高い城岳・遠見番山に囲まれている。そのため平地は狭く、集落は海岸に沿って密集している。またすり鉢状の地形を有しており、その中心部に民家がまとまって立地し、特徴的な集落構造となっている(図4-32、33)。海岸は美しい玉砂利と広い板状の磯からなり、昔は遠足で訪れる場所として、島民にとっての思い出深い活用がなされていた集落であることも現地でのヒアリング調査より把握された(図4-34)。椿原集落は汐池集落同様、ラグーンが存在していた史実があり、ラグーンが陸地化してできた地形であると捉えられる。一方で、集落の背後には段々畑が形成されていたが、前述したように同じく昭和40年頃からの農業縮小によって消失に至っている。

集落の中央には水田、後背には段々畑が存在していたことが調査より明らかとなっており、上記段々畑に囲まれた集落構造は圍繞的な景観を呈していたものと推察される。また水田近くには段々畑の存在を窺わせる石積みが随所に残されている(図4-35)。また集落を見下ろす後背山中には、豊作と豊漁を祈願する稻荷神社が存在していた(図4-36)。集落が賑わっていた頃には、稻荷神社から集落を見下ろす景観体験が存在していたものと考えられ、稻荷神社から集落への俯瞰景は、椿原集落の生業と密接な文化的景観の価値が認められるものといえる。しかしながら、現在、神社までの道は十分な維持管理がなされておらず、山中の祠までの経路も繁茂した樹木によって覆われてしまっている。祠本体も草木に覆われ、周辺の石垣も崩れ、保全管理上の課題が明白なものとなった(図4-37)。

一方、集落後方の遠見番山は、江戸初期、山頂に遠見番所を構えたことからこの名が付いたとされている。ここからは福江島、久賀島、若松島が眺められ、烽火を上げるには絶好の場所であった。遠見番所を設けた理由は、当時鎖国を実施していた江戸幕府の命令で設置したもので、外国船の警戒と密貿易の取締りを行っていた。しかし、現地踏査からは、遠見番所と椿原

集落との生業に関わる関連性は抽出されなかった。

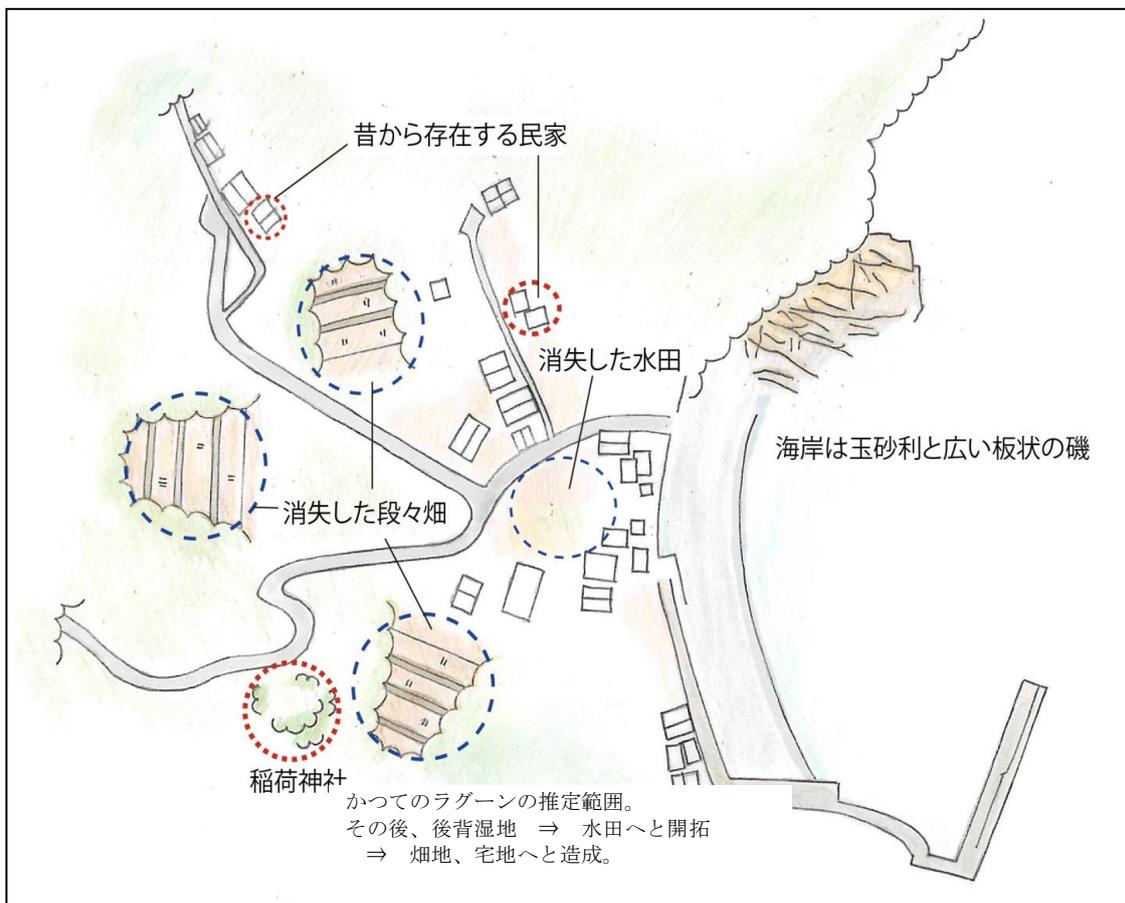


図4-31 椿原集落の平面構成図



図4-32 椿原(S40)



図4-33 椿原(H30)



図4-34 椿原の海岸



図4-35 水田や段々畑の石積



図4-36 稲荷神社



図4-37 管理されていない稲荷神社の祠

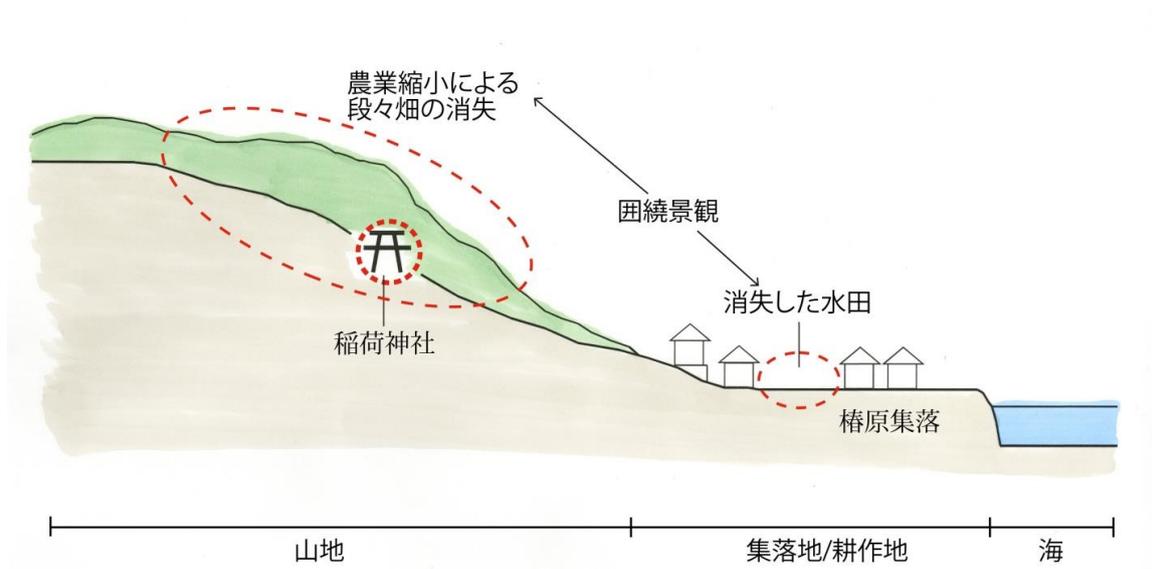


図4-38 椿原集落の地形断面の模式図と景観構造

【脚注】

(註1) 潟湖(せきこ)とも呼ばれ、湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形である。

(註2) 明治12年(1879)、現在の新上五島町新魚目集落に生まれた。明39年(1906)に先祖代々の建設業を継ぐ。20才の頃から教会の建築にたずさわり、これをきっかけにペルー神父らと交流を深め、教会建築家としてのスタートを切った。

(註3) 一般県道奈留島、1992年竣工

(註4) 金比羅は奈留島内のあちこちに祀られている。

(註5) 薬師堂には薬師如来、愛嬌のある南方の仏(流れ仏)、お大師さん等多数の仏が祀られている。

【参考文献】

- 1) 福嶋梨乃:長崎県五島市奈留島における景観構造解析と重要文化的景観選定にむけた課題
土木学会西部支部研究発表会講演概要集, 2016
- 2) 木方十根、福島綾子、高尾忠志、柴田久:九州離島のキリスト教系集落の維持管理活動に関する研究、住宅総合財団研究論文集 No. 36 2009年版、p. 73、平成21年
- 3) 前掲書1)
- 4) 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」について
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/suisenchu/pdf/nagasaki_amakusa_kanrenisan.pdf
- 5) 奈留町郷土誌編纂委員会:奈留町郷土誌 p. 137
- 6) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域、p. II-148、平成20年

- 7) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 138、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 8) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 132、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 9) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 131、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 10) 篠原修編：景観用語事典（増補改訂版）、彰国社、pp. 158-161、2007
- 11) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌、p. 274、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 12) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 126、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 13) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 128、平成 16 年 7 月 31 日発行
- 14) 奈留町郷土誌編纂委員会：奈留町郷土誌 p. 113、平成 16 年 7 月 31 日発行

第2節 各集落の世帯平面構成と景観構成要素

ここでは、先述した集落において、代表的な民家を対象として集落景観を構成する基本単位として位置づけ、世帯単位の景観に注目し、その構成と特徴を抽出した。

1) 江上集落

奈留島の北西部に位置し、大串湾に面する小さな入り江に開けた集落である。後方には山が迫り、平地に恵まれていない自然状況のもと小規模な半農半漁が行われていた(図4-39)。

現在は、遠命寺トンネルが開通し、奈留の中心部から車(所要時間約20分)での往来が可能になっている。昭和50年代以降、漁業の低迷と地域産業の不在により、集落外への人材の流出が続き、信徒人口も減少し、集落内には廃屋や耕作放棄地が増加している。

また、幹線道路から枝分かれする小道に、少数の世帯単位が集合して形成され、ひとつの景観単位を構成している。

・W邸周辺

【世帯単位の平面構成】

周辺の畑や植生などの景観構成要素の分布と家屋の位置関係を実測調査によって把握し、景観構成の特徴を抽出する。

代表的民家であるW邸周辺は斜面の石垣と小規模な畑が民家と調和しながら、小さなまとまりを形成している。作成した配置図を図4-40に示す。緩やかな斜面地に家屋5棟と農具小屋、畑が配置されている。石積みによって段状に土地の造成を行われ、家屋を結ぶように道がある。周辺の林地部では、広範囲にツバキが植生している。

畑は小規模で基本的に自らで消費する量しか栽培していない。現在、集落内の家屋のうち2棟は、老朽化と豪雨の影響で倒壊している¹⁾。

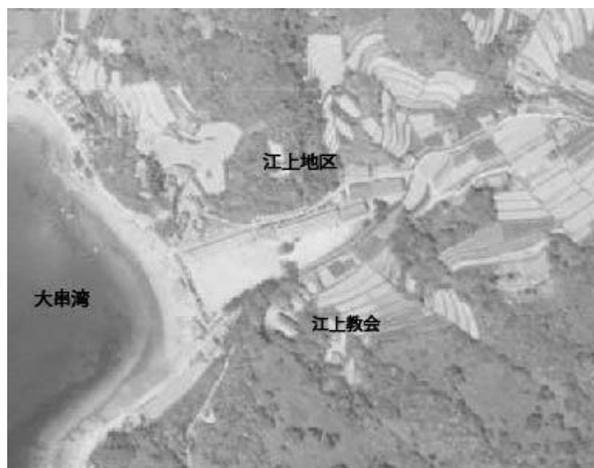


図4-39 1965年の航空写真(国土地理院撮影)

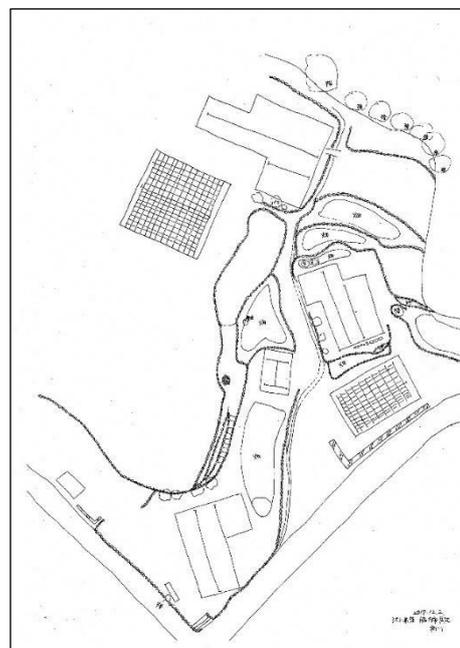


図4-40 江上集落W邸周辺配置図

【代表的民家の平面・断面構成】

集落景観を構成する基本単位として、世帯単位の景観に注目し、その構成と特徴を抽出する。江上集落に現存する民家のうち、建築年代が古く集落の代表的民家となり得る家屋とその周辺環境の実測調査を行った。

W邸の主屋は梁行4間、桁行5間、屋根は切妻屋の瓦葺きである。小屋組は登り梁形式が取られている。

斜面地に造られた敷地で、西側が道に面している。

南側には畑、北側には井戸と畑がある。また、東側には椿が一本植えられており、石積みの斜面が迫る。

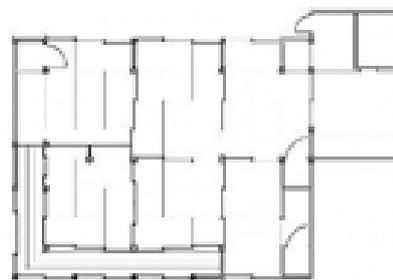


図4-41 W邸平面図



図4-42 江上集落W邸周辺



図4-43 W邸

・E邸周辺

【世帯単位の平面構成】

現地調査によって作成した配置図を図4-44に示す。斜面地に造られた敷地である。南側は石積みの斜面と山の木々が迫り、北側は見晴らしがよい。家屋付近には車庫、カンコロ棚が配置され、庭にはツバキとモチノキが植えられ、わずかながら畑が設けられている。

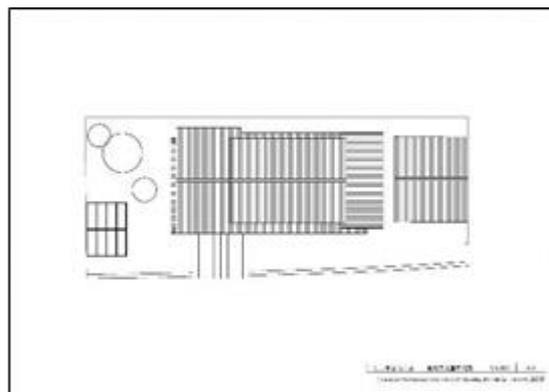


図4-44 E邸配置図

【代表的民家の平面・断面構成】

平面構成

主屋は梁行3.5間、桁行6間、屋根は切妻 屋根の瓦葺きである。前面の北面に半間、南面に四半間の縁側を廻らす。建物東側の桁行2間分は増築部分と考えられる。屋根は主屋と同じく切妻屋根の瓦葺きである。北面、東面に半間、南面に一間の縁側を設ける。

玄関と床の間のある間にある、板敷の間の床下にはイモガマが2つ設けられている。座敷には祭壇があり、マリア像が置かれている。

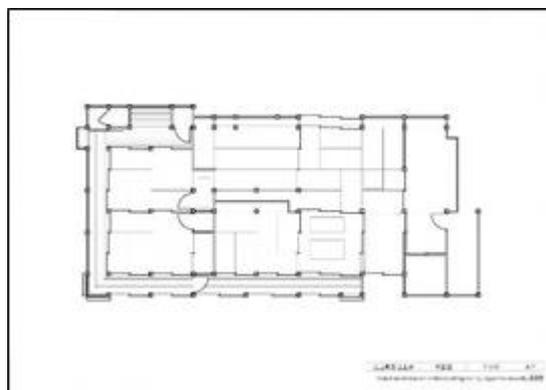


図4-45 E邸平面図

断面構成

小屋組は登り梁形式となっていて、屋根裏に大きな空間が確保され倉庫として使用されている。イモガマは深さ2m程度の縦穴としてつくられたものである。敷板を外して入ることができる。

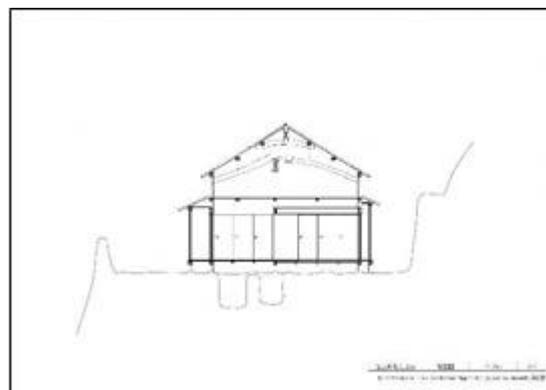


図4-46 E邸断面図

景観構成要素

景観の基本構成単位である世帯単位では、家屋・石積み・車庫・カンコロ棚・畑・椿などの景観構成要素が確認できた。これらの景観構成要素は調査対象家屋のみならず集落の世帯に一般的なものであるが、家屋はそれぞれ離れて立地しているため、これらの景観構成要素がひとつのまとまりをもって景観の基本単位を構成していると考えられる。



写真4-47 E邸空撮



写真4-48 イモガマ



写真 4-49 石積み



写真 4-50 祭壇

2) 西江上集落

西江上集落は、大串集落の日枝神社から南西へ 300m ほどのところにある小規模な移住集落である。大串湾に注ぐ小川（大脇川）の河口近くに漁具の倉庫と 3 軒の家屋がある。コンクリート製の流路に沿って上流に向かっていくと、草木が繁茂するなかに土留めの石積みが広範囲に広がっていることが確認できる。1965 年の空中写真（図 4-51）を見ると、河川に沿って距離 500m、標高 150m あたりまでの南斜面に段々畑が展開している様子がわかる。現地踏査では、その途上において瓦や木材の残骸や建物の基礎など、生活の痕跡を 2 か所ほど確認でき、そのうち 1 か所ではイモガマと思われる穴も存在した。

大串集落におけるヒアリングでは、江上集落と大串集落の間にも西江上集落と同様の河川沿いに移住集落があり、そこではイワシの加工を営んでいたという。いずれも小規模で現在はほぼ無人化しているが、小川に沿った急峻な斜面に形成された移住集落の特質を示す遺構であるといえる。



図 4-51 1965 年の航空写真(国土地理院)



図 4-52 大脇川沿いの石積み

3) 大串集落

大串集落は、島の北東部に位置している。南向きに開けた大串湾岸に沿った集落で、湾の奥は北方からも野首浦が入り込み、細くくびれている。後方には高い山が迫り、平地は狭い(図4-53)。また、江上天主堂前の遠命寺トンネルの掘削工事で出た土を再利用して高く積んだ防風堤も設置されている。大串湾は、明治以降、大串集落の主産業であるキビナゴ漁(地引き網漁)の良好な漁場として利用されてきた。すなわち、大串集落は奈留島内の漁業という生業の歴史を探る上で貴重な集落と位置付けられる。さらに大串湾入口の西側には、奈留島の地形的特徴であるラグーン(潟湖)が見られる(池塚湖)。

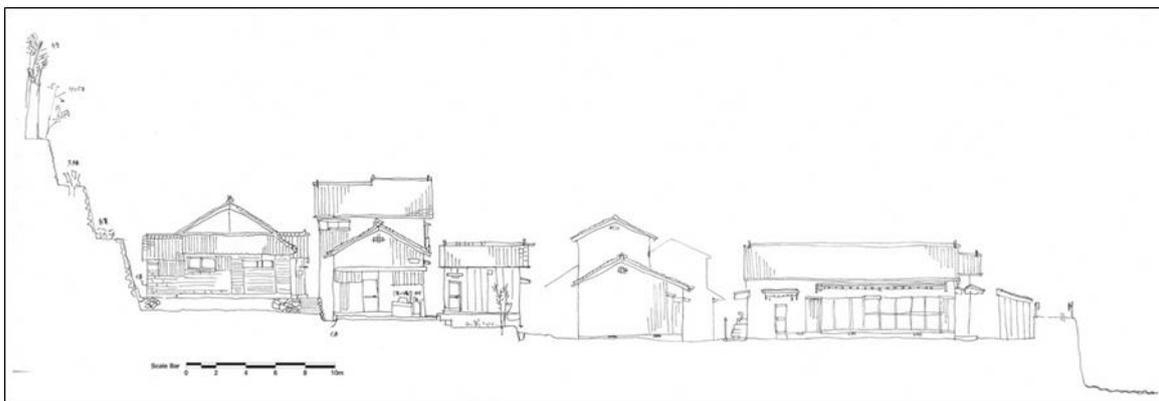


図4-53 大串集落通り断面図

【世帯単位の平面構成】

家屋が密集して配置されているが、一定の畑や空き地が確保されている。石積みや井戸、北側の斜面には椿が広範囲に渡り植えられている。

また、集落内には現在も営業する簡易郵便局と酒屋が存在する。

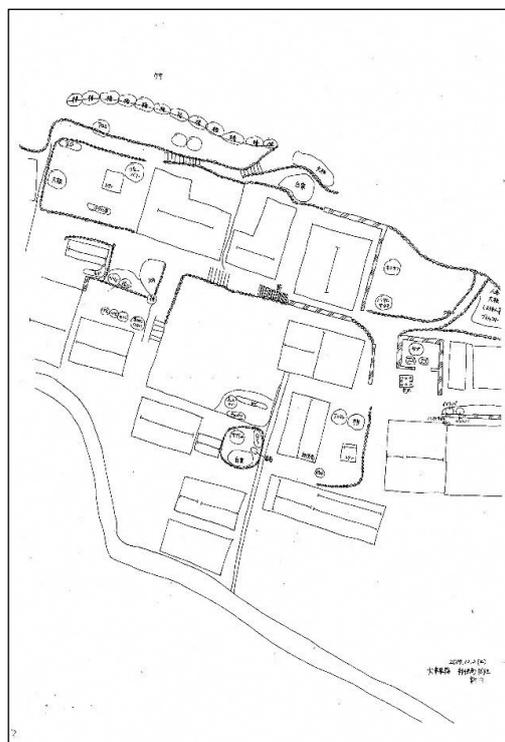


図4-54 大串集落内家屋配置図

・S邸

【平面・断面構成】

建物は夏井集落から移築されたものである。主屋は梁行4間、桁行5間、屋根は入母屋屋根の瓦葺きである。前面である南面に半間の縁側を設ける。

小屋組は登り梁形式となっていて、屋根裏に大きな空間が確保されている。移築前の材と、転用材とが組み合わされている。



図4-55 S邸立面図

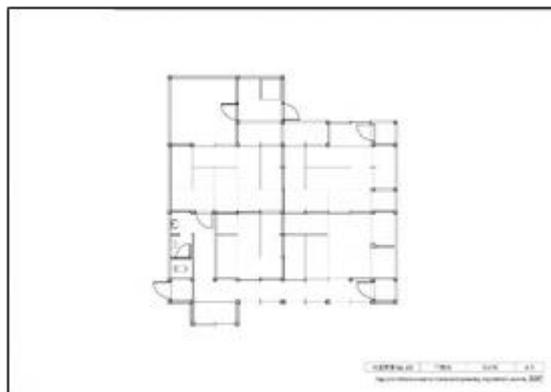


図4-56 S邸平面図



図4-57 S邸外観



図4-58 S邸屋根裏

注釈

- 1) 文献(1), p137-
- 2) ヒアリングにより(調査日:2017年12月1日)
- 3) ヒアリングにより(調査日:2018年2月21日)

参考文献

- (1) 奈留島町郷誌編纂委員会, 『奈留町郷誌』, 2004

4) 矢神集落

矢神集落は、奈留島の北東に位置し、船廻湾に面する集落である。西側の集落背後には山が迫り、東には湾の中央に矢神小島を望む。半島の以北には集落はなく、奈留島の北東端部の集落となっている。

集落の中心のかつてラグーンであったと思われる低地は、現在は畑として開墾され、多くの家屋は北部・東部および南部の谷沿いの斜面の裾あたりに分布する。また沿岸部の自然堤防上にも家屋のほか船小屋と思われる工作物が建つ。とくに斜面地においては世帯毎の単位が集合して形成され、ひとつの景観単位を構成している。

【世帯単位の平面構成】

・ X邸および周辺

周辺の畑や植生などの景観構成要素の分布と家屋の位置関係を実測調査によって把握し、景観構成の特徴を抽出する。

代表的民家であるX邸は、急峻な斜面に石垣を組み形成した段状の敷地に建つ。段状の敷地の奥行は狭く、家屋がようやく一軒入る程度の奥行きしかない。家屋の前後の石垣とも3メートル近い高さであり、大きな面積の平場はない(図4-59)。家屋の背後の斜面は主に果樹園として利用されており、キンカンなど柑橘系の果樹がツバキとともに栽培されている。敷地前面の段は比較的広い平場であり以前は畑だったと思われるが、現在ではビワ、キンカンなどの果樹がツバキとともに植えられている。このように傾斜が急な斜面地に高い石垣を組んで形成された世帯単位の有り様が矢神集落の景観構成の特徴の一つといえる。

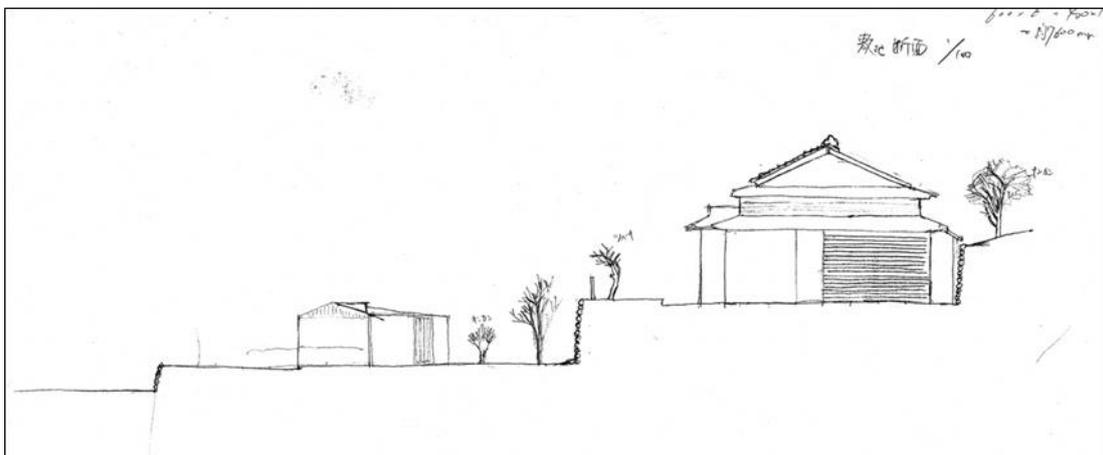


図4-59 矢神集落 X邸 家屋周辺断面

【代表的民家の平面・断面構成】

X邸の主屋は梁行4間、桁行6間半、屋根は切妻屋の瓦葺きである。高い石垣を組んで斜面地に造られた敷地に建ち、敷地の奥行きにはほとんど余裕がない。

ヒアリングによると昭和31年建築、築後62年の建物である。伝統的な形式を取っているも

この比較的築年数も浅い家屋であり、玄関から奥に伸びる廊下や、中の中の裏を通り納戸に至る廊下など、動線が明確化されている点に新しい平面構成の特徴を指摘できる。台所、厨房、風呂・トイレ等は改修されているが、玄関からトイレに直接至ることができることや、無窓の空間を倉庫とするなど、やはり合理的な間取りが追究されている。

軸組をみると玄関、中の間では差鴨居で構成し、長押は座敷の一部のみに使用されている。また和室の全ての天井を根太天井としている点も特徴的である。小屋組については主に和小屋で組んでいる。玄関下には幅 1,900mm、奥行 1,400mm、深さ 950mm という大きなイモガマが設けられている。

X邸は、矢神集落の急傾斜の敷地条件において、昭和 30 年代まで伝統的な住宅形式が継続していたことを示す事例である。とくに本格的なイモガマが存在していることは注目すべきである。敷地の形状や生業の形態から考えると、イモガマは現在の家屋以前からこの場所に存在していた可能性が高い。改築に際してもイモガマの位置をよすがとして家屋形式が決まったとするならば、イモガマは景観が保持される重要な要因となっている可能性も指摘できる。

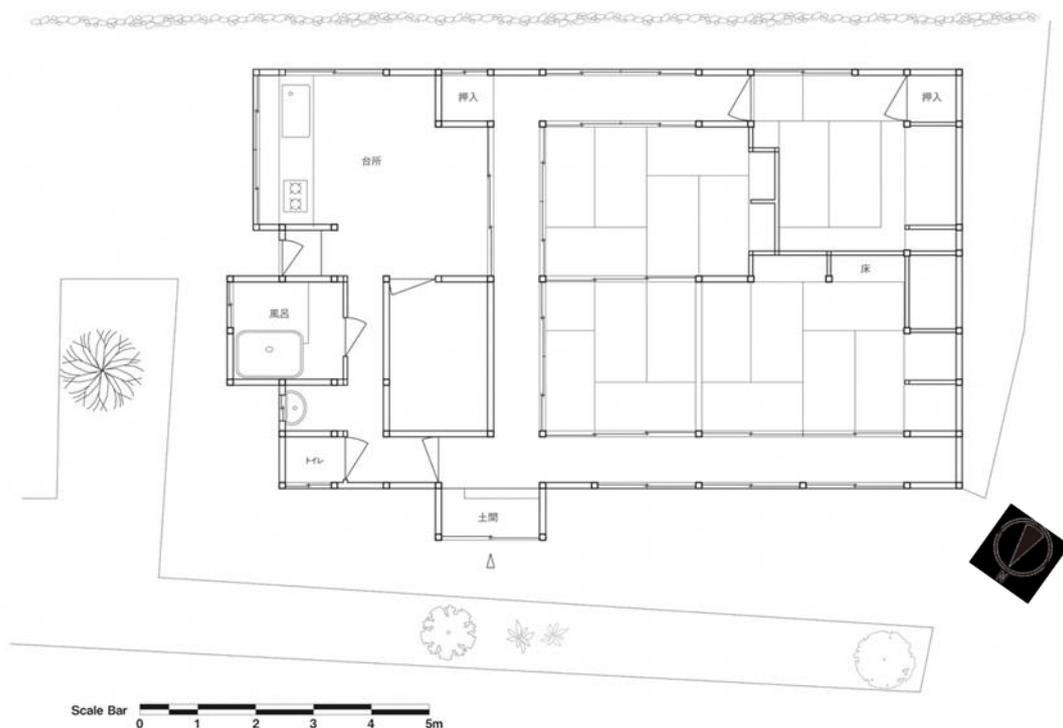
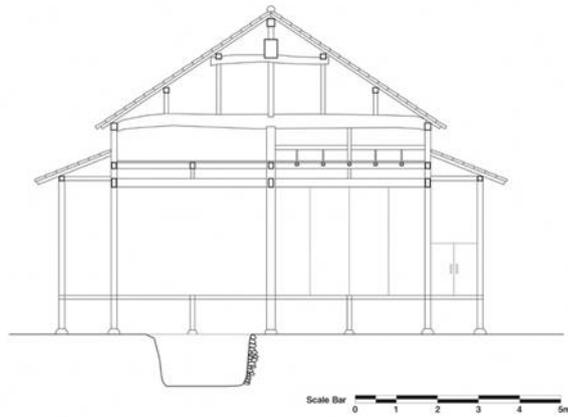


図 4-60 X邸 配置平面図

図4-61 X邸 断面図



5) 椿原集落

椿原集落は、奈留島の南東部に位置し、周囲を比較的標高の高い山々に囲まれている。集落は沿岸部にあり、玉砂利と板状の泥岩の岩盤からなる海岸の美しさも相まって、景観的にまとまりのある集落である。自然堤防の背後の低地は、以前は汐池集落や矢神集落同様、ラグーンもしくは低湿地であったと考えられる。家屋は海岸沿いの自然堤防の上と、斜面の麓部分に密集している。自然堤防上の家屋は特に密集しており、周辺に世帯毎の畑地は見られないが、斜面麓の世帯の背後の斜面には段畑と果樹園が広く拓かれており、さらにその背後のスギ・サワラが植林された裏山へと繋がっている。背後の山林の利用も含めて、集落全体に人の手が入った形跡が広く残されており、良く拓かれた集落であるといえる。



図4-62 椿原集落全景

【世帯単位の平面構成】

・M邸および周辺

代表的民家であるM邸は、海岸から運び上げられたと思われる青みを帯びた泥岩の丸石からなる高い石垣のうえに造成された、段状の敷地に建つ（図4-63）。家屋の前の石垣の高さは4メートル近い高さであり、背後にも岩山が迫り大きな面積の平地はない（図4-64）。ここでも敷地の奥行は狭く、家屋がようやく一軒入る程度の奥行きしかない。家屋の背後の斜面は岩盤となっており、最も手前の一帯にはツバキが生えているものの、現況では高度に利用されている様子はない。一方、家屋脇の南の斜面に向かって段状に畑地および果樹園が拓かれており、こちらは高度に利用されている。石垣下部の隣家（親類世帯）の間には畑地が広がり、果樹とともに甘藷が栽培されている（図4-65）。

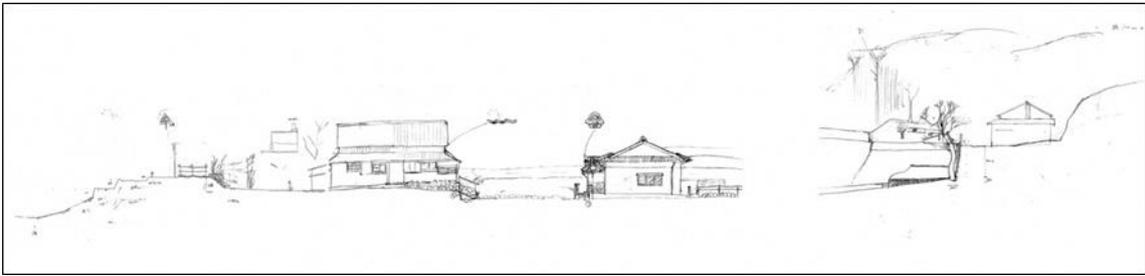


図4-63 椿原集落 M邸 立・断面図



写真4-64 M邸石垣



図4-65 M邸前の畑地と南斜面の果樹園

【平面・配置構成】

M邸の主屋は梁行4間、桁行6間、屋根は入母屋屋根の瓦葺きである。前面である南面に半間の縁側を設ける。5寸×5寸の大断面の大黒柱を中心に四方差し（差鴨居）とし、大黒柱を囲う四畳半の四室を設けた合理的な平面および構造形式となっており、良く整った間取りの家屋といえる。台所（キッチン）、風呂、トイレ等は比較的近年に改修されている。屋根裏の詳細調査は未完であり、小屋組については現時点では不明である。

前庭はコンクリート舗装され、コンクリートブロックで囲った植え込みには、ツバキのほかサツキツツジが植えられており、主に観賞用の庭となっている。

M邸は改修も見られるが、平面形式・構造形式（ただし屋根裏調査は未完）に、良く整った形式が見られ、奈留島の伝統的の家屋の典型的な形式を示す好例として評価できる。

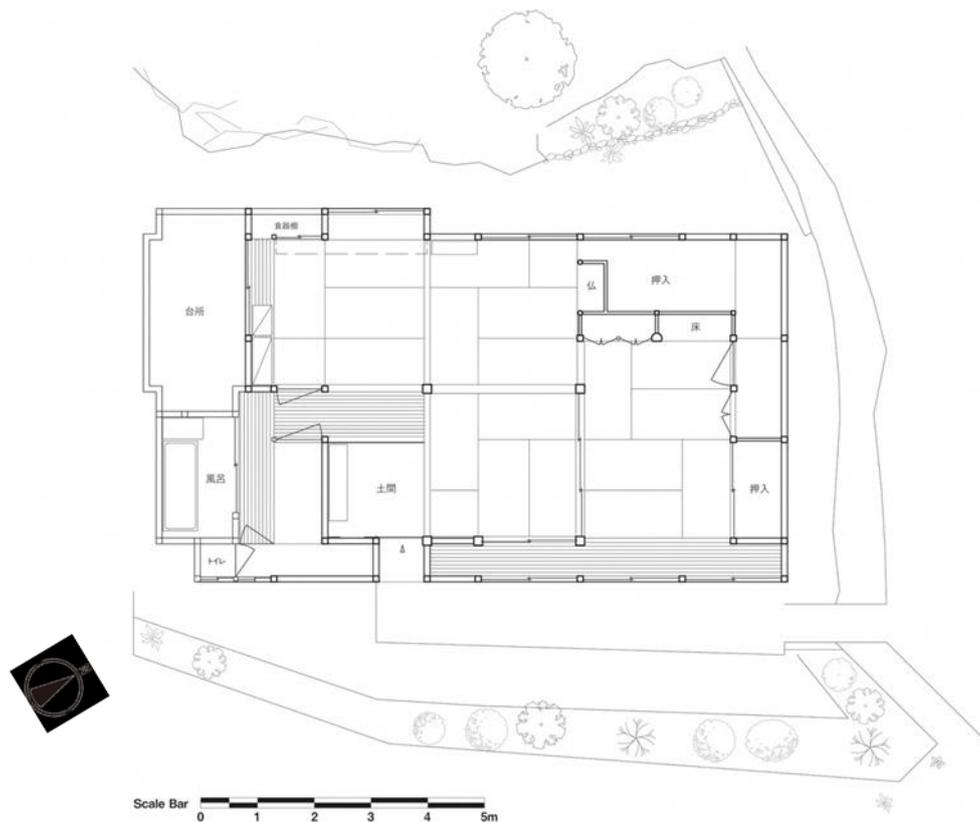


図4-66 M邸 配置平面図

第3節 集落の特徴的景観構成要素

ここでは、先述した集落における、植生などの自然的要素と人々の営為に関わりによって形成された特徴的な景観構成要素について述べる。

江上集落、大串集落が立地する奈留島北西部の大串郷は、奈留島のなかでも比較的面積がおおきな半島部を占めている。半島の中央部、江上集落の背後にあたる遠命寺峠付近は深い照葉樹林を形成し、植生図をみると地域の大半はタブノキ-ヤブニッケイ二次林を基調としており、半島東岸以東の地域がシイ・カシ二次林を基調としている点と異なっている (p. 80 参照)。

なお久賀島でも東部白岳以東など、南部から東部の外周部の山林がタブノキ-ヤブニッケイ二次林を基調としており、大串郷の地域は対岸の久賀島東岸と類似した植生であるといえる (p. 43 参照)。

この分布の要因には自然環境とともに、人間の活動領域との関係が深いように考察される。例えば久賀島を見ると白岳東陵が広くタブノキ-ヤブニッケイ二次林なのに対し、西陵はスギ-サワラ植林となっていることから分かります。人工的な植林が大きく植生を変えている側面が強い。これに比較すると、タブノキ-ヤブニッケイ二次林が形成されている地域は、概して人間の活動が行き届かない地域であると考えられる。

植生を代表する樹木の一つはタブノキである。タブノキはクスノキ科タブノキ属の常緑高木であり、九州・沖縄の森林のとくに海岸近くに多くみられる。太さ1メートルにもなる大木になることから、神社の鎮守の森などに神木として存在することもある。江上・大串集落を中心に、景観構成要素としてのタブノキの特徴を述べる。

なお、調査対象地域であった、矢神、汐池、椿原の各集落においては、植生の違いもあり、大串、江上集落で見られるタブノキの利用は見られなかった。

【江上集落のタブノキ群】

江上集落においてタブノキ群は景観構成要素として顕著な特徴を示している。写真13のとおり、江上川河口から江上天主堂前にかけて大規模なタブノキの群生が見られる(図4-67)。根元の目通りで800mmを超える大木も多く存在する。タブノキの群生は下五島の海岸域に幅広く見られるが、人間の活動域と重なる形でこれだけ大規模なタブノキ群が残存している例は他にはない。このタブノキ群の背後の谷筋には、スギ-サワラの植林が見られ、写真右の裸地になっている斜面は、江上天主堂建造のさい、スギを切り出した跡である。このように、江上集落でも人間による森林への介入の痕跡が明らかに見られる一方で、用材として質の落ちるタブノキが植林されることはまずない。したがって天主堂前のタブノキ群は、天主堂建設以前から存在した樹木を意図的に残したものであると考えられる。その理由は主に冬期に卓越する北西からの季節風を防ぐことと、夏期の西日対策と考えられる。なおタブノキは大木にはなるが腐りやすく、台風などの暴風には強いとはいえない。江上天主堂が南には向いていないという条件において初めて、タブノキの群生が残されたと考えられ、その点においても江上天主堂前の景観は貴重であるといえる。



図4-67 江上天主堂前のタブノキの群生

【下五島のカトリック集落のタブノキ群】

・五輪集落のタブノキ

久賀島東岸の五輪集落の旧五輪教会堂の周辺にも、江上集落同様タブノキが群生する(図4-68)。タブノキが残っているのは教会背後の比較的急峻な崖地である。そのほか五輪墓地も、一部はスギやイヌマキの植林で囲まれているが、南西面を中心に周辺はタブノキに囲まれている(図4-69)。しかし昨年の台風で墓地南のタブノキの大木の一本が折れた状態になっている。



図4-68 五輪集落のタブノキの群生



図4-69 五輪墓地のタブノキ

・堂崎集落のタブノキ

福江島には大規模なタブノキ-ヤブニッケイ二次林は存在しないが、福江江島北東部の奥浦地区の堂崎天主堂近傍の海岸部を中心として教会堂周辺に、部分的にまとまったタブノキ-ヤブニッケイ二次林が存在する（図4-70）。人家周辺の畑地の脇には、ツバキの屋敷林が整えられているが、そのすぐ背後にタブノキが群生する景観となっている（図4-71）。手前にツバキ、奥にタブノキという組み合わせは、堂崎天主堂脇のロザリオの MARIA 像背後にもみられる（図4-72）。いわばタブノキが「地」となり、ツバキを「図」になるような状況で、温帯照葉樹林が集落景観を構成している。



図4-71 畑の脇のツバキとタブノキ



図4-70 堂崎集落のタブノキ群生



図4-72 「ロザリオの MARIA」とツバキ、タブノキ

以上のように、下五島地域を代表する教会群がいずれもタブノキ群落と共存していることは、文化的景観の特質を考えるうえで注目に値する。この点についてはのちに詳しく考察する。

【大串集落のタブノキ】

大串集落の背後の森でもタブノキが優勢である。集落中心部、簡易郵便局近傍の広場には、タブノキの切り株と井戸が残り、その脇に水神様が祀られている（図4-73）。このタブノキは3年前に、大きくなりすぎた枝が災害時に近隣の家屋を傷める恐れが高まったために伐採されたという。81歳になるS家ご当主の幼少期にはすでにタブノキの大木は存在したといい、97歳になる親族が幼少の頃からあったと聞いているという。そして毎年旧暦の六月十日に「木徳宮」を祀る例祭が営まれてきたという。三年前の伐採後も、隣接する家屋の人々によって、毎年の例祭が営まれており、そのさいには「木徳宮」と記した幟を切り株の前に掲げるのだという（現時点では未調査）。



図4-73 大串集落内のタブノキの切り株と背後のタブノキ

このように巨木を依代として神を祀る風習は、下五島地域のカトリック集落以外の集落にも見られる。

福江島・奥浦地区の檜ノ浦には、県の天然記念物に指定されているアコウの巨木があり、根元には水神が祀られている（図4-74）。ただしアコウは寄生木であるため、現地で確認をしたところ、元の木は周囲にあるものと同様、タブノキである可能性が高い（図4-75）。海岸域に自生するタブノキには宿木が取り付く可能性も高いと考えられる。いずれにせよ、下五島地域の集落における巨木信仰を伝える事例である。



図4-74 アコウと背後のタブノキ林



図4-75 アコウと元のタブノキ（?）

【下五島地域の文化的景観におけるタブノキ群生の価値】

先に述べたように、タブノキの群生が残される条件には、自然条件とともに人為的条件も深く関係していると思われる。下五島の温帯照葉樹林において、高い利用価値が認められ、天然林としてのみならず屋敷林としても保全・利用されてきた樹種の代表はツバキであった。その一方、薪炭材、もしくは低級建築用材として利用価値はあるものの、敢えて植林する種類ではなかったのがタブノキである。人間の活動域に近いところでは、自然林もしくは二次林として存在したタブノキの多くは薪炭材等として粗放的に利用され、伐採後はスギやサワラの植林に代替されていったと考えられる。その一方で、島内の主な人間活動域から比較的離れたところ、すなわち近世後期以降、新たに居付集落が形成されたような場所には、比較的近年までタブノキの群生が残ったと考えられる。そうしたものが五輪や堂崎の教会堂周辺に今も残存し、あるいは江上天主堂前のように意図的に残されて、教会堂とともに集落景観を特徴付ける重要な景観構成要素となっていると考えられる。

また利用価値はそれほど高くないが大木となるタブノキには、条件が揃えば象徴性も付与されることがあったともいえる。第一に群生としての象徴性である。この点は江上集落のようなカトリック集落にのみ認められるのではなく、例えば福江島の戸岐神社の社叢には、自然林のタブノキ-ムサシアブミ群落が象徴的に残されている。また大串などの地下集落では、集落内の巨木に依代としての象徴性が付与され、祭礼を通してその象徴性が持続されている。

すなわちタブノキは、その群生、あるいは巨木の象徴的保全を通して、下五島地域における

自然（温帯照葉樹林）と人間との非積極的な関係を表現していると考えられる。なお積極的な関係を表現するものが、ツバキの利用であることはいうまでもない。下五島の文化的景観、森林の利用、屋敷林としての景観を特徴づけるものとして、ツバキとともにタブノキは重要な要素なのである。

第4節 集落構造から見た文化的景観の価値とその保護施策について

奈留島は前述したように22集落中11集落が移住集落⁷⁾であり、移住者である「潜伏キリシタン」註2)は島民に「カクレ」や「ヒラキ」「イツキ」等と呼ばれ、奈留島に先住していた11集落は仏教徒「地下(ジゲ)」と呼ばれていた。ここでは矢神・汐池・椿原が該当する「移住集落」について史実をまとめる。

移住集落は、寛政9年(1797年)、五島藩主五島盛運が大村純伊に対し、五島の農地開墾のために農民の移住を頼んだことを機に、約3千人もの移住者が誕生したことに始まりをもつ。奈留島では明治6年(1873年)に信仰の自由が認められたにもかかわらず、矢神・汐池・椿原の集落の信者はそのまま「かくれキリシタン」として信仰を保ち続けた。同じキリシタン信者でありながら、カトリック信者として復活せず、これまで同様、表面上では仏教、神道の信徒で、内々で密かにキリシタン信仰を守り続けたのである。奈留島では特にこの傾向が強く、葛島・江上集落以外のキリシタン集落は復活する動きは見られなかった。その理由として、潜伏してのキリシタン信仰が長きに渡ったことから、その間に仏教、神道、土俗信仰等と融合し、独自の宗教(自分たちの宗教は、表に出ず、内々密かに行わねばご利益がない宗教であると考えようになった)として定着し、あえてカトリック信者として復活する必要がなかったこと、奈留島では6割程度がキリシタン系の人達で、先住の仏教徒からの軽蔑、いじめ等も島外の集落よりも少なく、これまでの生活を変えてまでカトリック信者になる必要性を感じなかったことが考えられる。これに対し、矢神・汐池・椿原集落のかくれキリシタンは、平成2年以前には既に信仰形態が崩れており、現在、矢神・椿原集落は仏教・神道集落で、汐池集落は宗教混在集落となっている。

以上の結果を踏まえ、奈留島の景観を議論する際に欠かせない要素として「教会」と「神社」が挙げられるだろう。奈留島の開拓移住者の中には、多くの「潜伏キリシタン」が含まれており、既存集落を避けるように島の縁辺部に新たな集落が形成された。江上集落は、その典型的な例であり、移住者は細長い半島の各所にあった小規模な沖積地へ移住、狭い谷間を田畑に開拓を行っていった(図4-76)。そのため奈留島の集落景観は圍繞景観を呈する独特の景観となっている。しかし、近代(明治後半)に入ると漁業活動が活発になり、主たる生業が農業主体の半農半漁から漁業へ移り変わる。この頃から、囲いよう景観を構成する一部の段々畑が失われ、集落構造における外観の大きな変化につながった。また江上集落の海岸沿いに見られたガケダナ(図4-77、78)は、昭和40年以降の道路整備によって撤去されている。

奈留島における潜伏キリシタンの最初の移住先は、寛政9年(1797)以降の葛島^{かづらしま}であり、明治初期には葛島教会も建設されている。その後、潜伏キリシタンは、島内各地の未開拓地とし

て残されていた狭隘な谷間に移住していった。

明治元年に久賀島においてキリシタンの迫害(五島崩れ)が起こり、迫害は凄惨を極めるものであった。明治6年キリシタン禁制の高札が撤去され、信仰の自由が訪れたものの、奈留島において集落単位で復活したのは葛島と江上だけであった。その他の集落の信徒はそのまま、(いわゆる)「かくれキリシタン」として信仰を保ち続けたのである。

江上集落においては、明治39年、江上集落内に簡素な教会が建設され、大正7年に現在の江上天主堂(国指定重要文化財)が建設されたことは既に述べたが、島の各地に教会ができるまでカトリック信者たちは、舟で葛島教会や江上天主堂のミサを訪れていた。その後、大正15年には民家づくりの奈留教会が相ノ浦に建設され、続く昭和2年には南越にも教会堂が建設されている。

教会堂の建設は、無形の要素(信仰)が有形の要素(教会堂)へと体現したことを示す重要な景観構成要素である。しかし、現代は宗教離れの世の中であるとともに、昭和30年代以降、集落からの転出者が増え、これに伴う過疎化によって天主堂の組織維持が困難となっている。

江上集落北部の小高い丘にはカトリック墓地の形態を残すキリシタン墓地も存在している(図4-79)。

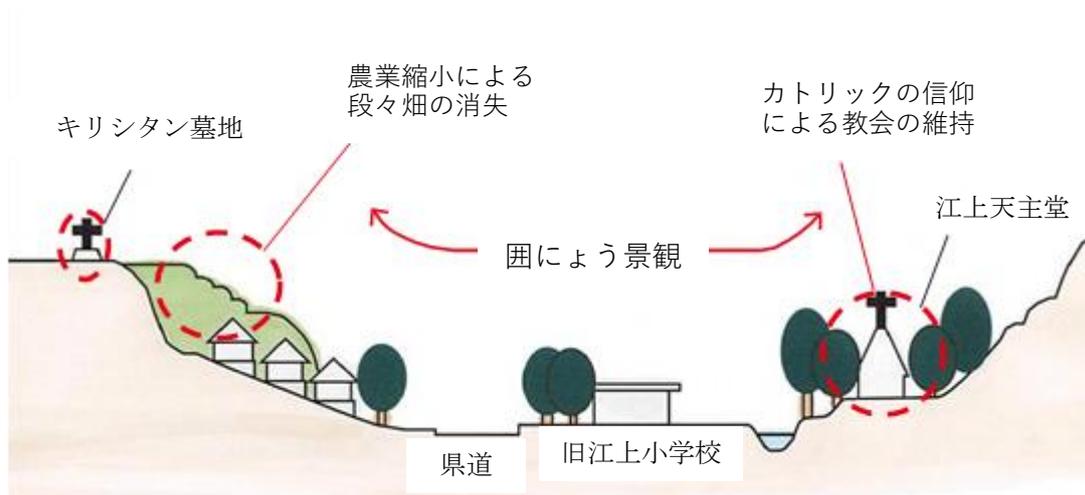


図4-76 江上集落の地形断面と景観模式図



図4-77 昭和40年頃の江上集落



図4-78 木造時代の江上小学校



図4-79 江上キリシタン墓地

一方、大串集落ではキビナゴ漁が盛んであった際、生業における景観構成要素となっていたガケダナはキビナゴ漁が衰退後の道路整備事業によって撤去され、現在はガケダナの痕跡を残すコンクリートの荷揚げ場が存在している（図4-81）。また日枝神社は大串集落の生業ならびに慣習と密接な関係にあり、同様に金比羅神社は豊漁と漁民の安全を祈る重要な場所として抽出された。しかし、現在は神社に参拝する島民の減少とともに十分な管理がなされておらず、日枝神社で行われていた例大祭は現在祈祷のみとなっている（図4-82）。

金比羅神社に至っては神社自体の荒廃も進んでおり（図4-83）、奈留島の原風景としても重要といえる金比羅神社からの集落に対する俯瞰景は現在眺めることが出来ない。また現状として祈祷のみとなっている日枝神社の祭事を含め、上記景観構成要素に対する保護は、今後の景観施策として重要と言えるだろう。（図4-80）

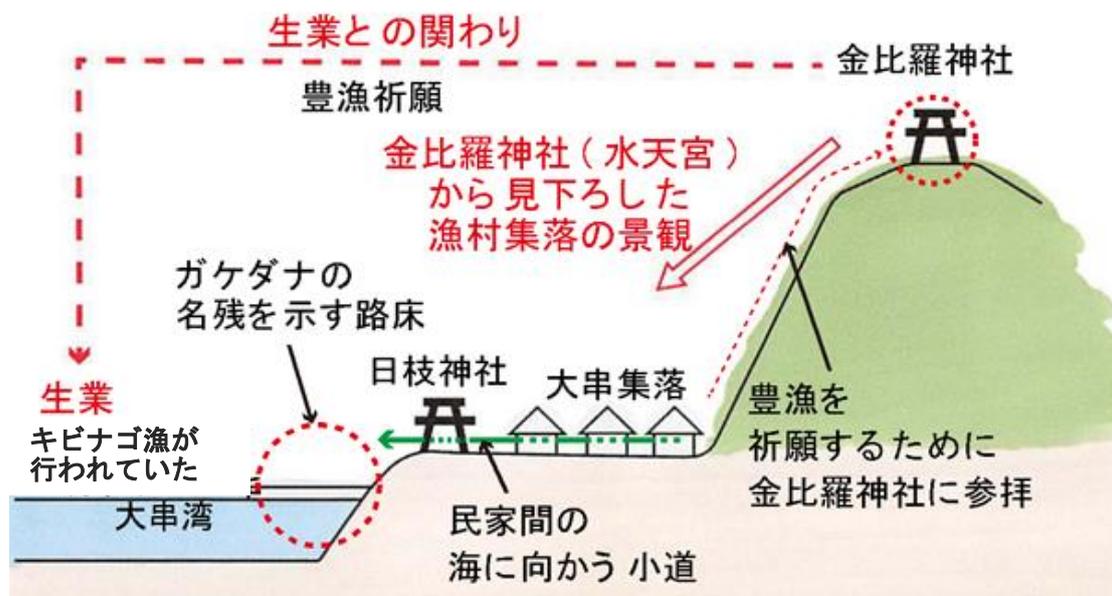


図4-80 大串集落の地形断面と景観模式図



図4-81 ガケダナの名残



図4-82 日枝神社例大祭



図4-83 金比羅神社

以上の結果をまとめると、まず奈留島の開拓移住者の中に多くの「潜伏キリシタン」が含まれ、移住者は細長い半島の各所にあった小規模な沖積地へ移住し、狭い谷間を田畑に開拓、新たな集落を形成させていったことが把握された。そのため奈留島の集落構造は圍繞的な景観を呈するものが多く、特徴的な地形として抽出できる。一方で、昭和40年頃を境に漁業活動が活発になり、主たる生業が農業主体の半農半漁から漁業へ移り変わったことから、圍繞景観を体験させる段々畑が失われ、集落構造における外観の大きな変化につながったものと考えられる。

矢神集落では、生業と密接な景観構成要素といえるガケダナは既に消失し、痕跡を残す石の基壇と木組み棚が存在しているのみである。また集落背後の段々畑もほとんど雑林に埋もれており、畑の存在をうかがわせる石積みが集落背後の山々に散見されていた。汐池集落は奈留島の特徴的な地形「ラグーン」を有しているが、汐池の水深は昔と比べ浅くなっており、このまま土砂が堆積し続ければ、ラグーンは消失する可能性も指摘される。また矢神集落と同様に、海沿いに存在していたガケダナも既に消失している。椿原集落に存在する稲荷神社は豊漁と豊作を祈願する重要な場所として抽出されたものの、十分な管理がなされておらず、稲荷神社からの集落に対する俯瞰景は現在存在していない。すなわち、奈留島における3集落は、海沿いの護岸、道路ならびに神社等に対する近代的なハード整備が進んでおり、生業と密接な文化的景観資源の消失が顕著である。よってこれまで述べてきた重要かつ保全すべき文化的景観構造、資源の把握とともに、これに対する景観保護施策が急務の課題と言えるだろう。

【脚注】

(註1) 潟湖(せきこ)とも呼ばれ、湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形である。

(註2) 文化財保護法による選択無形民俗文化財としての隠れキリシタンは「かくれキリシタン」と表記

【参考文献】

- 1) 福嶋梨乃:長崎県五島市奈留島における景観構造解析と重要文化的景観選定にむけた課題
土木学会西部支部研究発表会講演概要集, 2016
- 2) 木方十根, 福島綾子, 高尾忠志, 柴田久:九州離島のキリスト教系集落の維持管理活動に関する研究, 住宅総合財団研究論文集, pp. 503-504, 平成29年
- 3) ここでいう集落とは、便宜上、現在の自治会(町内会)を集落単位としている。
- 4) 奈留町郷土誌編纂委員会:奈留町郷土誌 p. 126, 平成16年7月31日発行
- 5) 前掲書4), p. 128
- 6) 前掲書7), p. 113
- 7) 長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・集落調査報告書 下五島地域, p. II-56, 平成20年